

比庵佳境の会

大巧若拙

九十二叟

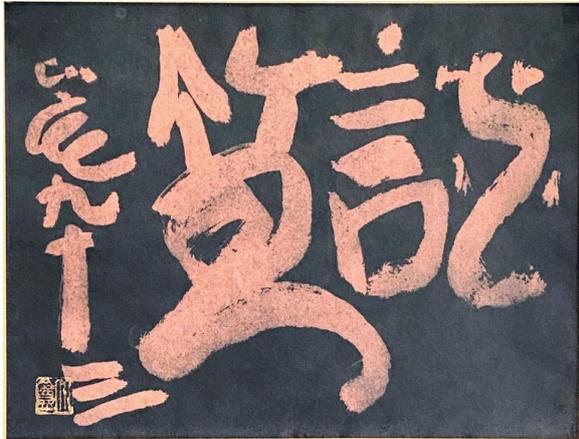
清水比庵



大巧若拙（だいこうじやくせつ）

この上なく巧みなものは一見稚拙に見える

老子の言葉



談笑

比庵九十三

清水比庵周辺の人々と

自用印と（五）最終回）

相模女子大学名誉教授

柿木原くみ

柿木原先生の比庵印章を中心に比庵と同時代の関係者についての力作は、会報14号から本号（18号）まで五回にまたがるもので、比庵芸術に関連深い人々の紹介を含めて比庵作品に捺印した多くの自用印についての解析は我々素人にとっては大変有益な報文です。最終回の本号の記載の前に心から感謝申し上げます。

比庵佳境の会 会長 清水 固



④② 「比庵」朱文印。押捺された作品七点のうち「比庵七十八」とある作品は二点あり、うち一点は「年々に良き年なれと祈りつつ拾ひし年の積もりたるかも」を書き、もう一点は「談笑」の二字を書いている。この印の特徴として、七点のうち画が入っているのは三点で、四点は書であるということがあげられる。年令は「八十一・八十四・八十七」が確認できる。



④③ 「比庵」朱文の長寸小印。七作品への押捺が確認できるが、年令を確認できるのは「春風景」と題する一点のみで「比庵九十一」とある。他の五点は「比庵」のみで、残りの一点はこの印のみの落款である。作品の掲載は昭和四五年刊行の『野水帖 比庵歌・書・画』に三点あるが、うち二点に書いてある短歌は『清水比庵短歌集』には掲載されていない。



④④ 「比盒」朱文印。側款には「琢？人刻」とあるが刻者未詳。押捺は六作品である。最も早い押捺は『高梁市名誉市民 清水比庵作品集』（平成九年）に掲載の「玉堂先生重き病より癒えたまひしをよろこびて詠める歌」と題する作品に認められる。玉堂は昭和三二年二月下旬心臓喘息病となり自宅療養、一時回復に向かったという。そのことを喜び詠んだ歌であるので比庵七十五歳と確定できる。川合玉堂の賛助を得た「野水会展」は昭和一七年に第一回展を開催、三二年の第一五回展は、六月三〇日に逝去した玉堂の追悼展となり終結した。

また、同作品集の「悼玉堂先生」と題する作品には「一年は早くも過ぎぬ此月の此日のことを思ふにも…」という長歌があり「昭和三十三年六月三十日 清水比庵」と記している。没後一年、比庵の玉堂への想いの深さが伝わる。

残りの五作品は「比庵八十八・九十」が各一点、「比庵九十一」が二点。「比庵九十二」は「生れ日」と題する作品で「生れ日を照らして花の天地にけれなみ比庵九十二歳 昭和五十年二月八日 清水比庵」は自身最後の誕生日となった日に書かれている。比庵はこの年十月二十四日逝去。この印は比庵にとって大切な節目に使われた印である。



④⑤ 「比盒」朱文横長の小印である。この印は『比庵百華』（昭六三）の印譜でのみ確認できる印で、現在は所在不明であるが、押捺作品は六点を数える。「ふるさとを歩いてゆけるところに山あり水あり語る友あり」を書いた「比盒七十六」に始まり、「比庵七十九」が一点、「比庵九十二」が二点、「比庵」のみが二点である。比較的長い期間使用されている。



④6 「比庵」朱文石印である。側款に「琢洞？」とあるが刻者未詳。作品への押捺は五点のみ確認。「比庵」のみが一点、「比庵八十四・八十六」が各一点、「比庵八十六」が二点で晩年に集中しているようである。この印は『清水比庵作品集』の表紙に拡大して使用されている。



④7 「比盒」朱文印。作品への押捺は五点のみ確認。「さみだれの日のつれづれに古筆帖とりいでて」という長歌を記した、竹林と雨蛙の画の作品「さみだれ」に押捺している。この印を押捺した落款はすべて「比庵」のみであるが、一点だけ比庵最後の年(九十三年)であることが確認できる。「新年に満天の夕くれなみや天地の神の恵やら比庵恵やら」を添えた作品『清水比庵 収蔵品図録』がある。

④8 「敬祈暑安」成語印で木印である。比庵の手書き文字を刻したと推察する。押捺の作品は五点確認でき、良寛詩二点と王之涣詩一点の漢字作品三点は、「昭和四十年夏八月書 比庵八十三」と落款にある。残り二点は同文で李白詩・蛾眉山月歌より二句と比庵歌一首を書いており「比庵八十六盛夏」とある。昭和四十年八月五日、比庵は笠岡の妹岡本章子を亡くしている。八月十四日付の秋田秋良宛の葉書の右上にこの印を押捺し、「お手紙ありがとうございました 夏負けで弱っているところへ妹の訃報ですつかりまあつてしまいましたが、いかにも残念です(後略)」と記している。

現在清水家保管の比庵自用印中に、比庵の



手書き文字を刻したと推察できる印は、比庵の座右名であった「心貧者幸也」と「難有」の二顆の木印がある。この他「毎日佳境」の書き印は自由自在に書いている。



④9 「比盒」白文印。押捺作品は「比庵八十七・八十八・八十九・九十三」の四作品である。いずれも歌・書・画の一体となった作品。最後の作品は比庵九十三の「紙雛」で「えをとめはえをとことあひえをとこはえをとめ」とあひ千代に「さかえむ」の歌を添え、最晩年の作とは思えない若々しさを見せている。



⑤0 「比盒」楕円形の印。下駄印という。「比」字は白文、「盒」字は朱文という構成である。側款には「竹林山房 溪泉刻」とあり、前号④6の側款にも「於竹林山房 溪泉刻」とあるが、刻者未詳。精密に布字された印である。「比庵九十一」が一点、「九十二」が二点、「九十三」が一点の計四点の最晩年の作品に押捺されている。



⑤1 「比盒」白文印。改刻された印。刻者未詳。押捺作品は四点。「八十一」比庵・比庵八十五」が各一点、「比庵八十七」が二点。「比庵八十五」の「松」は「歩き入る大松原や松をもて四方を塞がれ松の比庵となる」とユーモラスな作。



⑤2 「比盒」朱文印。押捺作品は三点確認。「八十比庵」は「朝起きて雑煮食うぶることのみわが正月もいかにたのしき」と一首を自由闊達に書いた作。「比庵八十二」は歌書画。「比庵八十五」の「老松」はうねりからんだ松の枝の隙間に朱がさしてくる作である。



⑤3 「比舟」白文印。押捺作品は初期の歌書画の小品三点確認。落款は三点共「比庵」のみ。「月夜」と題する作品は、合掌姿の老女に「虫のねも千々にさほひてぬばたまのこよひつくよむかしにおとらず」を添えている。「若上の蛙」は、落款印と同寸位の雨蛙を描く。「ふるさと」は自画像かと推察する。



⑤4 「比盒」白文印。書作品二点への押捺を確認。落款に「昭和四十四年盛夏 比庵八十七」とある作品は王維詩「竹里館」を三行に、比庵歌「さゝやかなる一歩月にといへる聲その聲きこゆ月の上よ

り」を二行で書いている。そして引首印の位置に④8「敬祈暑安」印を押捺している。他の一点は「竹聲の二字作品で「比庵八十八」とある。



⑤5 「比庵」白文木印。側款・琢とあるが刻者未詳。落款は比庵のみで二作品に押捺。一点は桜鯛の歌と画。他の一点は歌一首の書作品である。



⑤6 「比舟」朱文長方形小印。側款なし。押捺作品は二点で、一点は妹・岡本章子との合作。比庵の玉葱と唐辛子の画に、章子が「こはる日のひざしぬくとく垣の木にざるや飯ひつけならべたる 章」と短歌を添えている。落款は比庵。他の一点は「柿本人麿」。柿の実を前に置いた人麿像で、落款は比庵。また、秋田秋良への昭和二十六年二月二日付(比庵六十九歳)の葉書にも押捺されている。



⑤7 「比盒」白文小印。側款なし。押捺作品は二点確認。一点は「比庵八十五」の「滝風景」と題する歌書画の作品。他の一点は「踏青」。春景の家族のピクニックを描いた画で、お弁当を広げた両親の前で幼女二人が遊んでいる。落款は印のみである。



⑤8 「比庵」白文印。押捺作品は二点確認。一点は「比庵八十九」の「花紅柳緑」と題する歌書画の作品で、四冊の作品集に収録されている明るい作品。他の一点は「比庵九十」の「里山」と題する

歌書画の作品である。



69 「比庵」朱文長方印。押捺作品は二点確認。共に「比庵九十三」とあり

最晩年の作品で「紅白梅」と「不動大明王」である。「紅白梅」には「ひとの庭の梅も見ると歩き来し橋の上なる夕おぼる月」とあり、梅の頃には散歩もできたのか、橋は山手線に架かる染井橋かな、と推察する。



60 「比庵」白文印。押捺は二点確認。「比庵九十一」は疎菜の画に「たちねの母がつくりし食べものを老いてもいまでもわれはこのむも」を添える。他の一点は、「比庵九十二」の作で花菖蒲の画に歌が添えられている。



61 「比庵」白文印。側款なし。押捺作品一点確認。作品「早春」は昭和三七、八年頃と推定されている。



62 「比庵」朱文印。押捺が確認できた作品は、昭和四八年、書道研精会本部刊行の『九十一比庵』に収録され、「杖とりて歩きゆけるところにて山あり水あり歌の友もあり」が添えられた、故郷の風景を描いた「里山」一点のみである。



63 「比庵」白文の木印。下駄印である。押捺が確認されたのは一点のみで、「東京の灯

を見わたして戸をさしぬつねにかくしてうつくしく暮れる」と一首書かれた「東京の灯」と題する作品。



64 「比庵」朱文竹根印。押捺作品は一点のみ確認。「ざくろ」の画に、「ふるびたる

つゞれ錦にくれなみの玉のたぐひをつゝむごとくなり」と添えられている。



65 「比庵」白文印。押捺作品は一点確認。桃の画に「ただあつしあつしといひて夏の日を…」が添えられている。

66 「比庵」印中最も大きい印である。「三人行」との題に示すように論語の一節を書き「杖とりて歩いてゆけるところにて友のりをりなばたのしかるべし」を添えた「比庵八十九」の作品一点のみ押捺を確認した。



以上、六十六顆の印の作品への押捺について述べた。いま一顆、比庵の作品中、おそら

くは比庵の書いた四字句を木印の成語印とした「謹賀新年」も記載しておきたい。

67 「謹賀新年」朱文木印成語印。比庵自筆の「謹賀新年」を木印に刻した印と推察するが、現在は所在不明である。作品の押捺は五点で、全て試筆である。八十二歳の「昭和三十九年試筆比庵」に始まり「昭和四十年試筆比庵八十三」「比庵八十三試筆」「昭和四十二年試筆清水比庵」「比庵八十九試筆」の五作品で、歌書画による作品は一点、書のみ作品が四点である。これらの作品の落款には「比庵」の雅号印は使用されず「謹賀新年」の成語印が押捺されている。

また、秋田秋良宛の年賀状では、昭和三四・四三・四六年に押捺されている。掲載の印影は、秋田宛の葉書より採録しており実寸（縮小）ではないことを付記しておく。



この他、所在不明の印の押捺作品はAは「比庵」白文印で六点・Bは「比庵」朱文印で五点・Cは「比庵」朱文竹根印で四点・Dは「比庵八十九」白文印で二点・Eは「比庵九十三」白文印で一点の計一八点あること、書き印「比庵」の作品が六点あったことも付記しておく。さらに、落款に押捺のない作品も五十余点あること、また、現物の作品に当たりながらの作業ではなく作品集からの確認作業であつ

たので、判読不可や困難な作品も二十ほどを数えたことを付記しておく。

比庵自用印を通覧してのまとめ

『清水比庵作品集』（昭五三）では三五顆が掲載されている。また『比庵百華』（昭六三）では七二顆が掲載されている。いずれも実押の印影である。『清水比庵—毎日佳境—』（平一三）では凡例に「この印譜は、比庵印章のうち、現在確認されているものの中で、印影の明確な七三顆を掲載した」と記されているように作品からの収録で実押ではないが、比庵自用印が明かに集約されている。

『比庵百華』に掲載されていて『毎日佳境』に掲載のない印は朱文「文墨友」であり、『毎日佳境』にあり『比庵百華』にない印は朱文「清」水秀である。また、『毎日佳境』印譜中番と番は同印と推察するので、共に七二顆の掲載となる。各々一顆ずつ双方に掲載のない印があるので、合わせて七三顆を確認できる。そして、『作品集』掲載の三五顆はすべて他の二作品集に含まれている。

清水家に現在収蔵されている比庵自用印は七十顆である。数からみるとほぼ同数であるが内容は異なる。既刊の印譜七三顆はすべて雅号印で、押捺作品を確認できなかった印は一一顆。六二顆に、押捺作品が確認できた清水家所蔵印「秀一之印」「秀印」の二顆と「敬祈暑安」「謹賀新年（所在不明）」を加えた六六顆、そして⑨の「比庵」朱文印を加えて六七顆が、比庵作品に押捺されている自用印の総数となる。

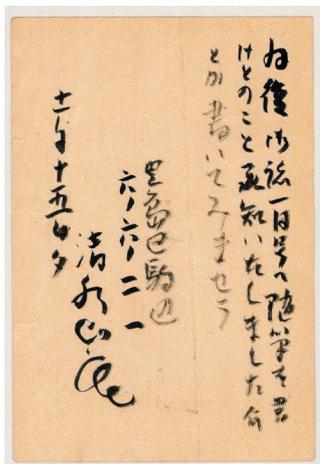
おわりに

清水比庵の周辺の人々について、多くの人々にお読みいただきたいと思いつつ、筆を運んだが、その魅力を語り得たかどうか心許ない。

手元に、谷崎昭男先生より平成二十七年二月に頂いた比庵の葉書がある。角川書店短歌編集部宛で、消印が読み取れないが、七円の葉書である。七円の葉書は昭和四十一年から四十六年まで通用していたので、その間の七月二十四日付で、比庵の人柄がそのまま流れていた文である。

拝啓短歌八月号へ小生の歌御掲載頂きし處・一首・一字が誤植、「東窓」とあるべきものです原稿が悪かったかもしれませんが別にも云ふところはありますせんが編集部御手持の雑誌だけは訂正しておいて下さい

比庵の住所は豊島区駒込六ノ六ノ二一と記されている。六義園から染井霊園に向かつて染井通りが真直のびているが、染井霊園まで百メートル程手前を右に入った所であった。



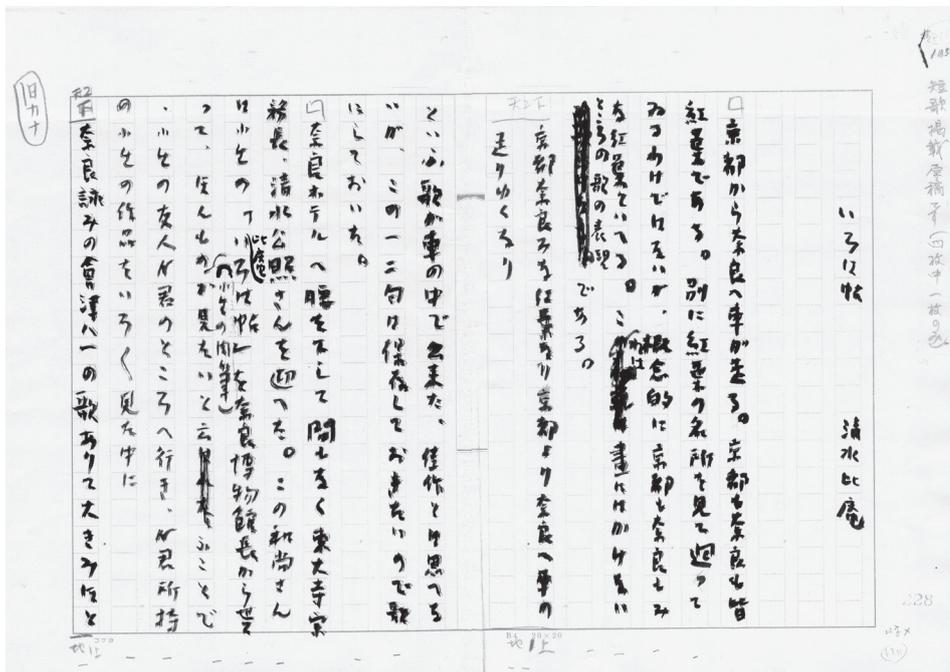
原稿依頼の返信 昭和47年11月16日付け

保田與重郎が『現代畸人伝』の装訂を依頼に行った比庵の住いである。筆者はその清水家の手前に住居していたことがある。そのことをお話ししており、比庵令孫國氏夫人は、「もう少し早くお知り合いになれていたら、母が話相手によるこんだでしょうね」と言っており、その方も逝かれた。

そして、比庵と筆者とを結んで下さった谷崎昭男先生は、いまその近く慈眼寺に眠っておられる。

比庵は角川書店「短歌」編集部から昭和四十七年に原稿依頼を受け、昭和四十七年十一月十六日付で依頼を受ける葉書を出している。そして十一月二十日付で「いろは帖」四百字詰原稿を送付している。これら比庵直筆の葉書や原稿を、谷崎昭男先生から頂戴した。その内容は会報第十四号三頁にすでに発表した。原稿を清書したので、その一頁目を原稿とともに最後に掲載した。

以上



「短歌」1月号掲載の「いろは帖」四百字詰め原稿（上）と筆者による清書（下）



原稿を投函した封筒

昭和47年11月20日付け

清水比庵とキリスト教 (清水比庵生誕以前)

比庵佳境の会 坂口隆

◇はじめに

この度、清水固氏のご要請により、清水比庵先生のキリスト教との関係について纏めてみたいと思う。

私の比庵の調査は、高梁市・清水比庵記念室から始まっている。皆さんは展示室の入り口近くの左側に掲げられた、比庵先生の大きな顔写真を眺められたことはあるだろうか。

独特の風貌と優しい眼差しとの奥にある底知れぬ奥深い静けさと、寂しさと、優しさに惹きつけられて私は暫くの間写真を眺め続けていた。この時によぎったのが「比庵先生とキリスト教の関係性」だった。

この事について纏めておきたいと思う。



高梁市清水比庵記念室入口

◇高梁に流れる至誠惻怛の精神

比庵は鶴代との結婚の条件として洗礼を受けたという記述が一般的な考えである。

しかし文化の町・高梁の深い歴史と、江戸時代にまで遡り、比庵の祖父・清水嘉助（じゅすけ）、父・質（ただし）に脈々と受け継がれた山田方谷（ほうこく）の「至誠惻怛」の精神、更には新島襄（じょう）、福西志計子（しげこ）、笹田金治郎に根付いたキリスト教の精神が相まって比庵の心にはキリスト教の精神が自然に備わっていたのではないかと推測している。

また比庵は人生の転機と言える場面で、大切な人との別れを経験している。この事にも心秘めるキリスト教の精神と共鳴していたのではないかと考えている。

※至誠惻怛について

「至誠」は極めて誠実なことで真心を意味し「惻怛」は痛み悲しむ心の意味で、即ち、まごころ（至誠）と痛み悲しむ心（惻怛）があれば、やさしく（仁）なれる。そして目上には誠を尽くし、目下には慈しみをもって接するという意味で、「心の持ち方をこのようにすれば物事をうまく運ぶことができる」と考え、この気持ちで生きる事が人としての基本である。」という精神である。

◇育ての親福西志計子

秀（比庵）の祖父・嘉助は備中松山藩に於いて剣術指南をしており、山田方谷の影響を深く受けている事が分かっている。

そして、父・質は遠い親戚にあたる福西志計子の順正女学校の開校にあたり、金銭面など様々な助力を行っている事も分かっている。

つまり質は嘉助から授かった至誠惻怛の精神をもって、キリスト教による教育の機会を守ろうとしていた事になる。質はキリスト教そのものを知らなかったかもしれないが、嘉助から受け継がれた精神性によって福西志

計子を支え続けたのだった。

しかし、質は秀が中学校に入学して間もなく亡くなってしまふ。この時、悲しみに暮れる秀を書生として迎え入れ、育てたのが福西志計子である。

当時、清水家は質の仕事の関係で笠岡に住んでおり、秀は一人高梁で生活していた。そのまま福西志計子が引き取って育てたという事になる。

順正女学校がまだ順調に運営できていなかった頃、質が志計子に助力した恩義、そして新島襄から受け継いだキリスト教の精神によって、福西志計子は秀を受け入れて育てようとしたのではないだろうか。

そして、福西志計子は秀に質の想いや世話になった話や、キリスト教の精神性などを事あるごとに話して聞かせていたに違いない。

しかし秀が落ちて着いて勉学に励みだした頃、事もあろうに福西志計子が亡くなってしまう。

多感な中学時代の一人暮らしに加えて、その間に大切な人を二人も亡くした秀の心には暗い影が覆ったことと容易に想像がつく。

その後、秀は努力を重ねて岡山第六高等学校に進み、更に京都帝国大学に進学することになる。

大学を卒業した秀は、父の職業と同じ司法官となり、二十五歳の時、明治四十一年七月十二日笹田金次郎の娘・鶴代と結婚する。

秀と鶴代は高梁キリスト教会に於いて結婚式を挙げ、溝牧師より洗礼を受けている。

調査の過程で、「比庵は結婚するために洗礼を受けた」という話をよく聞いたが、私はこれまでの調査で秀は自ら進んで洗礼を受けたのではないかと考えている。

そもそも調査を始めるきっかけは、「高梁市・清水比庵記念室」にある、清水比庵の柔らかな微笑みの大きな顔写真を見たことだったが、今はその柔らかな微笑みの源はキリス

トの教えにあったのだと確信している。

◇比庵とキリスト教

順正女学校開校の際の質らの助力や、福西志計子の熱い想い、新島襄から受け継いだキリスト教の事などを心に刻み込んで生活していたに違いない。

そして結婚にあたり秀は洗礼を受け、父、福西志計子、そして義父の教えを守る事を誓い、新たな門出を迎えた筈である。

しかし無情にも笹田金治郎がこの年に亡くなっており、秀はまたしても悲しみの淵に突き落とされる事となってしまった。

中学校に入学した直後に、自分の父を亡くし、福西家の書生になった翌年には福西志計子が亡くなり、今度は、結婚した直後に大切な妻の父が亡くなるという悲しみは、秀のどこか寂しい鬱陶気に繋がっているとと思う。

秀が高梁の町を大切にす理由の一つには、質と、福西志計子と、妻の父・金治郎と別れた辛い経験があつたが故ではないかと考えるようになった。

高梁キリスト教会に於いて鶴代との結婚を果たしキリスト教の洗礼を受けた秀は、神戸の三ノ宮近くに引越して、神戸地方裁判所の司法官としての人生を歩み始めたのだ。

そして明治四十一年四月、待望の長女・明子（はるこ）が誕生したが、鶴代の産後の肥立ちが悪く大変な思いをしたと秀は絵手紙に残している。

そして三ノ宮から少し離れた場所には、高梁教会と繋がりの深い神戸教会があり、秀と鶴代は日曜礼拝に参加していたのだろう。

◇安田銀行に転職東京住まい

結婚後の秀は神戸で司法官になったが、明子の誕生に加え健康面と給与面を考えて、一年後に安田銀行に転職を果たして東京住まいを始めている。

自宅の近くには、高梁キリスト教会と同じ教派に所属する日本キリスト教団の九段教会があり、比庵は鶴代と明子を連れて教会に通っていたのではないだろうか。

実際に令和元年十月にお会いした、明子の末娘・ワーデン充子さんによると、母親の明子が十歳の頃で、毎週のように日曜学校に通っていた事をよく話して貰ったそうである。

秀が大切な一人娘の明子と鶴代を二人だけで教会に通わせていたとは考え難く、毎週のように家族で通っていたのではないだろうか。

沢山の書物に散見される秀の優しさや辛かった出来事を纏めていくと、彼の周りには常にキリスト教の教えを真っ直ぐに見つめた人々がいて、秀がキリスト教の影響を受けていた事は否めない。

何よりも最愛の鶴代が、信仰告白をする程の敬虔なクリスチャンであった事で、秀は苦勞の中にも、艶やかな日々を送って行く術を身につけて行ったのではないだろうか。

◇安田銀行勤務と横手時代

そして、明治四十五年の六月、次女・間子（しずこ）が誕生するのだが、間子が生まれ幸せに包まれたのもつかの間、体の弱かった間子は生後十一か月で亡くなってしまったのだ。

愛娘を亡くし悲しみと苦しみで途方に暮れていた秀を救ったのは、当時勤めていた安田銀行の東京支店長だった。悲しみに暮れる秀を気遣う支店長の配慮で、自然豊かな横手支店への転勤をする事が出来たのだ。

この転勤が秀の沈んだ毎日から抜け出す契機となったようで、この頃より散歩やスケッチをよくするようになり、町の情景を題材にして、銀行の友人たちに多くの絵手紙送るようになっていく。

秀たち一家は横手に出来たばかりの日本



横手の風景 大正3年5月 比庵32歳
店の前（安田銀行横手支店の前）



横手の風景 大正3年 比庵32歳
「ふしみ人形に報いるにこの美人を以てします。これは店へ来る中で随一の美人です。横手の町でもやはり一流だと信じます。この画は似て居るといふ自信がありますから特に之を送ります。」

キリスト教会の開拓伝道として創立された横手教会に通っていたのではないだろうか。
この土地の温もりによって娘を亡くした悲しみも徐々に癒えているように感じられるが、父、福西志計子、義父、娘を天国に送った秀の心の内は、簡単に癒える事はなかったと私は思う。

◇古河財閥への転職

横手で約二年間を過ごした秀は、青森支店に転勤し、その後、安田銀行を退職して東京古河銀行に転職している。

秀はきつと安田銀行時代に辛い出来事の中でも努力を重ねて、経済人としての実力を蓄えていたのではないだろうか。

転職については、古河財閥が銀行事業に乗り出し、東京古河銀行を設立し、三年がたったところで古河財閥が力をつけて行く時代だった。そして、秀の転職の際に高梁出身者で初めて古河財閥に就職した、井上公二の力が

関与しているように思えてならない。
井上はこの年、古河合名会社の総理事になっており、古河グループで確固たる地位を固めていた。

◇東京古河銀行時代 赤坂榎坂近くの新居から兵庫県魚崎へ

そして秀は秋の深まる青森から転職のために上京し、東京赤坂の榎坂近く、現在のアメリカ大使館辺りに居を構えるのだった。

通勤時間は、東京古河銀行のある大手町まで徒歩で三十五分、新居のほど近くに、高梁キリスト教会と同じ新島襄の流れを汲む霊南坂教会があり、『比庵明け暮れ』によると、鶴代と明子は日曜毎に礼拝に通っていたとある。

ここでも秀は教会の近くに居を構えて、通勤の利便性よりも高梁に係る教会を優先していたとしか思えないのだった。

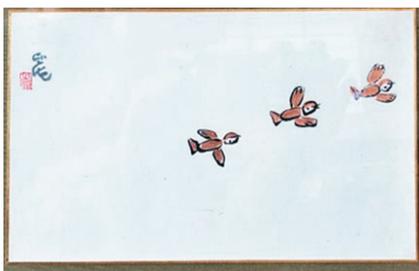
当時の明子は、自宅と霊南坂教会と小学校（現在の赤坂小学校）を、三角形の頂点で結ぶ様な位置関係で生活していたようで、自然とキリスト教の空間で心を育んでいったに違いない。

そして秀の仕事ぶりが認められて転勤の命が下り、鶴代と新婚時代を過ごした兵庫県に生活の場を移していく。



魚崎の風景 大正9年 比庵38歳
れんげの花（4月）

「昨日は日曜日で好天気でありました。電車に乗るのはいやですから近い野を歩きました。此画は其収穫であります。絵具を付けない方がよかったですかも知れませんが、付けたほうが気分はよくあらはれます。」



「には優しい表情があるといわれるようになった秘密が、そこにあるのではあるまいか。」

場所は魚崎。
海に近い閑静な漁師町の一角で、新たな生活をはじめた秀一家だった。
秀は転職から僅か一年程で、東京古河銀行大阪南船場支店・支店長に抜擢されている。経済人としての、秀の評価の高さが伺われる出来事ではないだろうか。

魚崎に住んでからは充実した日々だったようで、この時期に屏風に誕生日ごとに雀を書き込んだ「比庵雀」の原点があるようだ。明子の回想から抜粋してみよう。

当時住んでいた魚崎の庭に雀が毎日のように飛んできていた。父はときどき私たちに米を撒かせていた。縁側に胡坐をかいて、父はいつまでも飽きずに雀の動きを眺めているが、やがて紙と鉛筆を出してせせせと写生を始める。

立ったたり座ったり場所をずらせたりして、角度を変えながら顔を急がしく動かしている。何枚もの紙が雀百態で埋まっているのを、母がそつと引き寄せて眺めていることもあったが、無心に顔と手を動かしている父の姿が、私の脳裏には今もはっきり残っている。

同じことの繰り返しの中で父は雀と一緒に遊んでいたのかもしれない。後に「比庵雀」



ふるさと雀
ほのぼのと 目のさめければ しばらくして
ふるさと雀 よく鳴きにけり 比庵九十二

この頃の秀は経済人としても成功し、支店長という地位も名声も得て大変安定した生活を送っていた事だろう。

明子の『比庵明け暮れ』には、神戸に越してきてから秀の給料が上がってずいぶん生活が楽になった事や、自宅への人の出入りが多くなった事、酒屋のすぐ向いに住んでいたことや、宴会も自宅で開催していた事などが生き生きと描かれている。

◇娘・明子と神戸女学院

そして娘・明子は、大正十一年に神戸女学院に入学している。

神戸女学院は同志社大学と同じく、アメリカン・ボードのミッション宣教師派遣団体と密接な関わりの中で設立されている。そして神戸女学院と同志社は、アメリカン・ボードが情熱を注いで作り上げた学校であり、何れも明治八年に開校している。

つまり新島襄に関係するミッションスクールだったわけである。ここからも秀と鶴代のキリスト教への想いを感じる事が出来る。

また福西志計子から順正女学院を託された河合久の妹・河合謙との大学時代から続く交流を通じて、秀は神戸女学院と順正女学校とが教員交流を実施していた事も良く知っていたに違いない。

このように神戸と高梁の人知の繋がりに、安心して明子を預ける事が出来たのではないだろうか。

◇歌人清水比庵の原点

秀は後に魚崎時代の歌を『比庵晴れ』の中に残している。

この頃の歌を『比庵晴れ』に残すという事から考えて、清水比庵の歌人人生の原点はこの時期にあったのではないかと考えている。

この頃の秀は、早朝の散歩・スケッチ、そして洋画家・松原三五郎に人体デッサン等を習い、鶴代は三味線の稽古をするなど、家族揃って落ち着いた平和な日々を送っていた。

海から近かった事もあり、明子と一緒に水泳をする話や、小学校の友達の話、家族で遠くまで散策に行った話など、明るく楽しい雰囲気を伝える記録が沢山残っている。

東北の押し潰されそうな、灰色の雲に覆われた空にも似た心が、まさに『比庵晴れ』に変わっていく時代だったのかもしれない。

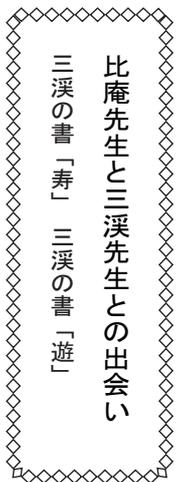
◇おわりに

今回は清水秀の若かりし頃の出来事を抜粋しながら、清水比庵という偉大な芸術家とキリスト教との関係の原点を描いてみた。

何度も悲しみの淵を彷徨い、それでも努力して経済力を身につけ家族を養ってきた清水秀の心の支えの一つに、キリスト教があったのではないかと私は考えている。

次回、歌人・清水比庵のその後の人生をお話したいと思う。

以上



比庵佳境の会 小川 雅子

私は、岡山県高梁市生まれの小川雅子と申します。

この度ご縁があつて、比庵佳境の会に夫婦で入会させていただきました。

私の母方の曾祖母 西悌(ニシテイ)が、比庵先生と弟の三溪先生と古い知り合いで、悌の一族(私達夫婦も含めて)は特に三溪先生の作品をいろいろ持っておりました。子供ながらに季節を感じる画や書にいつかお会いできたらどんなに素敵だろうと思っております。

私の両親は三溪先生に、先生の好物の吊るし柿をお送りして、お礼のお手紙と一緒に沢山の書や画をいただきました。両親はその中の「遊」を私に、「寿」を妹に結婚の時、持たせてくれて、今も大切に飾っています。



遊 三溪 九十二



寿 三溪 九十一



高梁市木屋旅館にて
前列左から比庵先生、曾祖母、三溪先生

今年 SOGO で開催された院展で比留間さんに出会いました。

かつて比庵展の会場を提供して頂いた前上郷地区センター長の方が院展に初入选され、比留間さんがその絵を鑑賞なさっているところで出会ったのが比庵先生との引き合わせの最初でした。

その日の出会いが佳境の会への入口となりました。そして比庵先生のお孫さんの固さんにお会いする事ができました。

固さんから比庵先生の画や書を沢山見せていただき、比庵先生の生い立ちを聞き、現在に至るまで私の叔母公子八十八才(曾祖母悌の末娘)は今神戸の老人ホームに入所しておりますが、電話でこの度の事を話しましたら、とてもびっくりしていました。そして、比庵先生にいただいたあざみを飾っていると申しておりました。比庵先生は、季節のお便りを出すに必ず、絵手紙を下さつたと、とても懐かしく思い出しておりました。とても優しく、筆まめな先生だったとも聞きました。私はそれを聞いた事がとても嬉しく、また固さんに伝えられることも幸せに思っています。

固さんとの比庵先生の素敵なエピソードを繋ぎ合わせるような時間はとても楽しく、いつも胸がいっぱいになります。固さんの素晴らしいお人柄の中に比庵先生を感じずにはいられないのです。

心のバリアフリーとでもいいますか、年齢も時空も超えてしまうような感じですよ。

この度、固さんと比留間さんと主人と楽しくお茶をしていた中で、比庵先生の生誕一四〇周年を記念してカレンダー作りませんか？と提案してみました。これが具体化し、沢山の、本当に沢山の、比庵先生の作品の中から、毎月の画を一緒に選んで行く過程はとても楽しく、特に八月の高梁の松山踊りは、高梁生まれの私が子供の頃からお盆に毎年楽しみに参加していたもので、見事なタッチで描かれていて、お気に入りの一枚です。今年、子供の頃から淡く思っていた夢が叶いました夢のようです。きっと曾祖母も喜んでい



痕の月大空に輝きてさへぎるものもなき踊りなり 比庵九十一

思います。この素敵なご縁を大切に、私も微力ながら、比庵先生の素敵な作品を紹介していきたいと思えます。以上

編集後記

比庵佳境の会

会長 清水 固

1 比庵カレンダー

比庵生誕一四〇周年を記念して二〇二三年比庵カレンダーを制作することになりました。冊子タイプです。送料を無料にするために、会報18号に同封いたしました。一冊一〇〇〇円でお一人様五冊までとさせていただきます。とりあえず会員登録に一冊お送りしますが、複数冊ご希望の方は、私 090-6340-9181 までご連絡ください。

尚、今年十一月に実施する庄戸会館での比庵展（下記）や高梁市比庵会などでも販売いたします。

一冊一〇〇〇円についてのお願いを別紙に書きましたのでご覧ください。

2 比庵展のお知らせ

来年が比庵生誕一四〇年なので、次の美術館等で比庵展を実施します。

- ① 今年十一月二十二日（午後）・二十三日（午前・午後） 庄戸会館（清水固の町内会の会館）で開催。内訳は清水所有の作品と、岡山県の方から提出された作品併せて約四〇点です。（1項記載のカレンダーも販売。）詳細希望の方は清水（090-6340-9181）までお電話下さい
- ② 栃木県日光市小杉放庵記念美術館 清水比庵展 二〇二三年二月四日（土）

（四月九日（日））

電話 0283-50-1200 休館日：月曜日

③ 岡山県高梁市歴史美術館 清水比庵展

二〇二三年二月十八日（土）～五月二十二日（月）

電話 0866-21-0180 休館日：火曜日

④ 岡山県笠岡市竹斎美術館 清水比庵展

二〇二三年二月十八日（土）～四月二十三日（日）

電話 0865-63-3967 休館日：月曜日

⑤ 岡山県立美術館と岡山県真庭市十字屋

迎賓館（館長 牧 生夫氏）が来年比庵展開催を検討中だが詳細は未定です。

③ ホームページ
比庵生誕一四〇周年を記念して、比庵佳境の会のホームページを制作しましたので、左記アドレスにアクセスしてご覧ください。
<https://hiankaky.com>

④ 東京新聞の記事
九月一日（木）の東京新聞（首都圏版）に比庵関連の記事を編集局員阿部博行氏が記載してくれました。「老いても前向き『毎日佳境』』という題で半ページの記事です。お読みになっておられない方のためにメールで

会費納入のお願い
令和4年度会費を下記に納入されますようお願いいたします。
一口、1,000円（複数口歓迎）
三井住友銀行鶴見支店
普通 7061558
名義 クボタノブユキ
なお現金で会長「清水固」宅（下記）に郵送されても結構です。

比庵佳境の会

会長 清水 固（清水比庵の孫）

〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-5-18

TEL&FAX 045-893-8932

携帯 090-6340-9181

URL : <https://hiankaky.com>

メール katashi-shimizu@hat.hi-ho.ne.jp

幹事：比留間 哲生

〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-25-7

TEL 090-4608-0488

コピーを送りますのでご希望の方は私にご一報ください。



「昭和の良寛」56歳から歌と書画「80歳で勝負」